

寝
取
ら
れ

サ
ン
プ
ル

どうして私たちは、こんな風になってしまったんだろう――。
こんなはずじゃなかったのに……。

「くるみ……ほら、もっと口開けて？」

強引に滑り込んでくる舌に、思考が溶かされる。

「んっ……ルカ………」

「ため息出るほどに……本当に可愛い……」

まさか、あの日を境に……

義理の兄のパートナーであるこの人に、自分がここまで壊されてしまうなんて思ってもみなかった。

――さかのぼること、数日前。

「奏ちゃん……大好き……好き」

「俺も大好きだよ。お土産たくさん買ってくるからな？三泊五日……いい子にしてるんよ？」

「ん……わかった……。寂しいな……」

（ずっと一緒に寝ていたから、やっぱり寂しい……）

「俺も同じや。くるみ。愛してる」

離れる前日、いつものように深い溺愛で満たされた。

当日、空港へ向かう奏真さんを見送り、私は彼がいない四日間はカフェで作業をすることにした。

三泊五日の不在は、想像以上に寂しい。けれど、我慢しなきゃ。

——神楽坂のカフェ。

「作業完了……久しぶりの一人か。いつぶりだろう」

伸びをしながら、コーヒーを一口。一人だと時間が長く感じて、夕食をどうしようか迷っていたその時。

スマホが光った。

メッセージを開いた瞬間、私の心臓がドクンと跳ねる。

「今日、思ったより早く仕事が終わってさ。」

…今、君の顔が浮かんだんだけど。

もし時間あったら、今から一緒にごはん行かない？」

……弥生さんだ。会うのは半年ぶりくらいだろうか。

『お久しぶりです。嬉しいです、どこへ行けばいいですか？』

……いいよね。身内なんだし。

——待ち合わせは、駅前のホテル十八時——

「久しぶり。……あれ？前からこんなに、ドキッとする雰囲気だったっけ」

「え……あ。弥生さんこそ、髪切りました？」

「ん。気分変えたくてね……」

以前の肩下までの長い髪を切り、ラウンドマッシュヘアになっていた。綺麗さと色気が混じり合った雰囲気を感じていた。

そして切れ長の瞳に、ハーフのような整った顔立ち。奏ちゃんとは違う、妖艶で吸い込まれるような色気がある。私は思わず、その顔をじっと見つめてしまっていた。

「悠哉も奏真も仕事人間だから、君も大変だろう？……たまには、秘書っていう立場も、誰かの奥さんっていう立場も忘れて。ただの『くるみちゃん』に戻ればいいのに」

そう言っ、弥生さんの長い指が隙間を埋めるように、静かに、深く絡められていく。

「……弥生さんだって、同じじゃないですか」

私が震える声で返すと、彼はゆっくりと、だけど目は笑わずに微笑んだ。

「僕？……僕と悠哉がどんな風に見えてるの？」

「えっ……どうなのかな……」

「ビジネスパートナーただ……それだけだよ」

「そう、なんですね……」

「付き合いが長いからね。……僕たちの話は、もういいよ」

それからは、お互いの関係や、他愛のない好きなもの、今までの恋愛。

弥生さんの温度に引き込まれるうちに、時間は甘く、あつという間に過ぎていった。

「八時半か……。ちょうどいい時間だね」

弥生さんはそう言ってスマートフォンに会計を済ませると、「送るよ。タクシーのところまで行こうか」と私を促した。

けれど、エントランスの向こうには、いつの間にかしとんと小雨が降り始めていた。

「わあ……雨ですね……」

スマホで配車アプリを開いてみたけれど、タクシーは一台も見つからない。

「……何かイベントでもあるのかな。珍しいね、全然捕まらない」

「きつと、歓送迎会の時期だからですよ」

「あ……そっか。だからか……」

弥生さんは一瞬黙って雨の降る外を見つめると、小さく息を吐いてスマホをポケットに仕舞い込んだ。

その直後、私の手に弥生さんの長い指が重なった。

「え！？ 弥生さん……？」

「戻ろっか」

「え……？」

「ちよつと……待って……っ。ダメだよ！ 私には、奏ちゃんがいるから。こんなのダメだよ……」

お酒のせいで頭がふわふわして、足元が心もとない。

そんな私の困惑を溶かすように、弥生さんの顔が近づき、唇に柔らかな感触が落ちると舌が割り込んでくる——クチユ。

……心臓が、跳ねる。

「くるみちゃん……ベッドに行こうか」

深いキスの最中、指先の動きがくちゅくちゅとクリトリスを回しながら弄る。

「んんっ……ダメ……あっ……いきそっ……！！」

「いいよ。じゃあ、まずは指でイッておこうか」

どうして……ルカは私の弱いところをすべて知っているの……

初めてのはずなのに。彼に触れられるたび、自分でも知らない快感のスイッチが次々と入っていくっ……

「いや……あつ、あつ——あんっ……ルカ……っ。イク！っ」

ズブズブと深い場所まで挿れながら、ルカはリズムカルに腰を振り始めた。

それだけでなく、空いた指先で一番敏感なクリをピンポイントで弾いてくる。

ヌル……クチュ——

指を抜こうとすると、ぬちゅ……♡と蜜が絡みついて離さない。

ルカは低く笑って耳元で囁く。『こんなに締めつけて……まだ足りないんだ？ もっと欲しいって、言ってみなよ。』

「意地悪……っ。欲しい……っ……」

（反則だよ……こんなの、おかしくなる……！）

「あつ……！ もう、変になるっ……」

「くるみちゃん……まだ始まったばかりだよ？」

——エロ沼の続きは本編で♡——

目次

目次

Lesson 1 甘い不在と、美しき毒

Lesson 2 秘められた名前、ルカの甘い毒

Lesson 3 先入観の罠、暴かれた素顔

Lesson 4 秘密のクローゼットと、彼の素顔

Lesson 5 残り香と、偽りの日常

Lesson 6 I love it too |

Lesson 7 重なる秘密、1錠に込めた溺愛

Lesson 8 明かされた真実

L e s s o n 9 秘められた鼓動

L e s s o n 10 略奪のチェックメイト

L e s s o n 11 背徳のチェックメイト、幸福のプロローグ

L e s s o n 12 仕組まれた運命の中で、僕らは永遠に恋をする